



# きらつと教育

晩年を迎えたあるシスターは余暇を利用して随筆を書き始めました。過去を追憶しながら、あるいは、日頃から考えていることなどを気の向くままに書き留めた文章の中に「きらつと光る」教育的な示唆があります。

8回シリーズの6番目です。どうぞお楽しみください。

## 6 知床旅情

「知床の岬にハマナスの咲くころ、思い出しておくれ、俺たちのことを」

この歌を聞くたびに、初めて養護施設に配属された時のことを思い出す。

「あなたに一番かわいい子供たちをまかせます」との長上の言葉、それは全く正反対であった。13名の大変な子供たち。さまざまな訳でここに預けられた子供たち、「ああ、やめたい」と何度も思った。

ある日、静岡県の子原の松原へ遠足に行き、嬉々として遊んでいる子供たちを見ながら、ひとり静かに考えていた。「シスター 見て、こんなきれいな石」、目を輝かせて小さな手のひらの白い小石を見せた。「私の宝箱に入れておこう」。それは風雨にさらされて白くなった小石、こんな石を見て喜んで自分の宝物とする子供の純真な心に、自分を恥ずかしく思うと同時に心を打たれた。

ある朝食のとき、一人の 暴れん坊の子どもが「シスター、忘れていない？」「私、薄目して待っていたんだ」。私の母は一人一人の子どもに布団をかけ静かにとんとんと肩を押さえてくれたこと、それを思い出してこの子どもたちにやっていた。こんな小さいことを待っている子ども、かわいいなあと思った。けれど、毎日、言うことを聞かない。気に入らなければ悪態をつき、無視する。13人の子供の世話は並大抵のことではなかった。戦後すでに3、4年過ぎても食糧難は続いていた。食糧倉庫からパンを持ってくる、小さい子からのお菓子の巻き上げ…。「あなたの見方（世話の仕方）が悪い」などなど…。先輩のシスターからの注意を受けることが多い毎日であった。

ある日、ご飯を食べさせながら、「どうしたら、小さい子供のお菓子を取らなくなる？」「お菓子をいっぱいくれたら」。私は母に手紙を書いた。母はお菓子をいっぱい、弟と一緒に持ってきてくれた。私は、お母さんありがとうと、母の後ろ姿に手を合わせた。

ある日、隣のクラスの子供と大喧嘩をした。理由を聞くと私について悪口を言ったとのこと。さんざん私に悪態をつき、困らせる子供たちが…。

こうして5年の歳月が過ぎ、卒園の時が来た。やっと解放されると思う心、が、一人一人を見ると、かわいいなどと思う心が高まっていった。そのお別れするとき、子供たちは自分たちの思いを「知床旅情の詩」を替え歌にして歌ってくれた。「忘れないで、思い出しておくれ私達のことを…。涙を流しながら歌ってくれた、6年の歳月！私の84年の人生、忘れがたい思い出の一つである。ときどき、思いだすとき、ハーモニカで一人静かに「知床旅情」を吹いている。

(シスターK.M.)